



下さがりつた蔦ちやばこの茶ちやばこ筥

伊藤裕美

---

---

ひとたび風が吹けば冴えた冷気が頬を撫でる夏の高原に、光沢は昨夜着いたばかりだった。

東京市内に仕事を残す祖父と父より一足早く、祖母と母、弟妹とともにやってきた。避暑地での日々を考えると胸が躍り、光沢はうまく寝つけぬまま朝を迎えてしまった。

光沢はひとりで身仕舞いをして、まだ明け切らぬ空の下に出た。見上げれば遠くまで、深く濃い青色の空が広がっている。

「涼しい。本当に、市内と全然違うのよねエ」

光沢はひとり呟きながら、そろそろと白樺の林へ向かっていった。

この避暑地のほうぼうに、勝手に「光沢の木」と決めている気に入りの木々がある。

（光沢の辛夷、一年ぶりね。花の季節に来たことはないけれど、ちゃんと分かつてよ。光沢の紅葉。紅く染まったところを一度見てみたいものだわ）

高原に来るとまず自分の木々に挨拶してまわるのが、光沢お決まりの儀式だった。

柵と柵、樺の木にも一本ずつ「光沢の木」があったが、一等の気に入りは白樺の木、それも白樺の林が途切れた原っぱに泰然と立つ一本だった。

光沢は林を抜け、待ちきれずに原っぱに駆け出した。が、ハツとして足を止めた。

空と溶け合う青い霞のなかで、蠢くものがある。白い人影である。

人影は行ったり来たりしている。ひらりと掬い上げられる腕、軽やかに蹴り上げられる足、力強く拳を突き上げたかと思えば、その指をやさしくほどき、頭上に振りかざす。頭はその手をかわし、そのまま背中までやわらかく反る。足踏みしながらくるくと旋回し、ぴたりと止まる。今度は反対に回り始める。

霧が立ち込めはじめ、姿がさらに見えにくくなってからも、人影は舞い続けた。朝が来たことを告げる舞いか、花が咲くことを報せる舞いか。それとも白樺自身がその器を抜け出して、夏の到来を言祝いでいるのか。光沢はそんなふう感じた。

耳をすませば、歌声も聞こえてくる。かほそく儂げな、けれど心を惹きつける強さもあわせ持つ歌声だった。

幽かすかな美しき。光沢はずっと見ていたいと思つた。だが、舞いも歌も唐突に終わつた。その代わりに「誰ッ」という硬い声をする。

「おどかしてごめんさい。待って、行かないで」

霧は舞い手の姿を隠そうとしているかのようにどんどん濃くなつていった。

「わたし、光沢っていうの。あなたは？」

「光沢……蜂苑はちだの光沢さま？」

どうやら舞い手は少女らしい。声から驚きと怯えが伝わってくる。

「わたしのこと、ご存知なの？」

草をかき分ける音がした。少女がサツと立ち去つた音だった。

光沢はしばらくの間ひとり立ちつくしていた。霧に濡れしんなりとしていた髪や着物が乾きはじめた。陽が昇り、霧が晴れた原っぱには、気入りの白樺の木が一本、泰然と立っているだけだった。

避暑地の高原には女学校の友人のほか、ここでしか会えない知り合いがたくさんいる。光沢はあらかたの片付けを済ませた午後、日よけに洋傘をさして出掛けた。マスクを付けることも忘れない。昨年の夏から猛威を振るつたスペイン風邪の流行はこの夏、一区切りついたと思われていた。蜂苑家では念のため、マスク生活を続ける方針だった。テニスコートやボート乗り場に知つた顔を見つけることができたが、やはりその顔の下半分をマスクで覆っている者が多い。

「蜂苑家の皆様がいらつしやること、楽しみにしてしましたわ。毎年最後にいらつしやるのですもの」

顔見知りの少女にさつそく声を掛けられた。

「七月中は暑さを我慢しようというおじい様の方針がありますの。わたくしたちも逸はなる気持ちでおりましたのよ」

答えながら光沢は、ひとり離れて佇む背の高い少女から目が離せずにいた。沢瀉おもだかの柄の綿めん緞ろうに前下がりの断髪。断髪は光沢の通う官立の女学校では高学年にひとりいるだけで、まだ珍しい。落ち着いた着物の柄や背の高さから見、光沢より年上かもしれない。

「はじめまして、かしら？」

光沢は思い切つて声を掛けた。凜とした立ち姿に心が騒いで仕様がなかった。

「わたし、蜂苑光沢と申します。昨日着いたばかりで、ご挨拶が遅れてしまつて」

声を掛けられて振り返つた少女は、ちよつと驚いたように目を見開いた。その表情にはまだあどけなさが残つてゐる。

「はじめまして、鷹城小巻たかしろこまきといひます。避暑地は今年が初めてですの」

初対面のふたりはちよつとだけマスクを外して顔を見せ合つた。小巻はきりりとした顔立ちで、矢じりに似た沢瀉の葉模様の着物がよく似合つていた。光沢は、腰までの黒髪をありふれたおさげにし、標準より低い身長の方が幼く見えることを知つていた。自ら声を掛けておいて気後れしている、小巻が「雪輪模様の麻のお着物、とても涼しげね」と微笑んだ。光沢も微笑みを返すと、ふたりはすっかり打ち解けた。

小巻は基督教女学校キリスト教女子学校に通う十五歳で、光沢よりひとつ年上であつた。光沢は以前、基督教女学校のバザーに出掛けたことを思い出して言つた。

「教会やシスターの方々、学校の清きよかな雰囲気きんぎに、憧れを抱いてしまつたわ。生徒の皆様が幅の広いとりどりのリボンリボンを髪に飾つていらつしやるのもうらやましかつた」

「光沢さまの女学校では、髪にリボンリボンを飾つてはいけなの？」

「袴はかまに合わせるのもおとなしい柄がらの銘仙めいせんなのよ。質素しつそという規律きりぎが時々窮屈きうくつになるの」

「うちもあまり煌きらびやかな出で立ちでたちは注意ちゆういされるようになったわ」

小巻がなぐさめるように言うので、光沢はつとめて陽気な声を出す。

「そうだわ小巻さま、うちの園遊会えんぎうかいにいらして。昼の部ひるぶでわたし、お点前てんぜんすることになったの。うんとおしやれして会いましょうよ」

「蜂苑家の園遊会えんぎうかい、特に桜さくらが見事みごとだつてお聞きしているわ。伺つてもいいの？ 本ほん当とうに？」

「来年の話ですけれど、指切りさしきりしましょ」

ふたりは小指こさきを交えて振つた。

「十三参りのお祝あづかりいに誂あつらえていただいたお着物がお気に入りなの。それを着ようかしら」